４章－１　鎌倉時代の文化

問題

■確認問題

1　大仏様（天竺様）　2　頂相　3　尊円入道親王　4　公案　5　蘭溪道隆
6　悪人　7　只管打坐　8　南無妙法蓮華経　9　立正安国論　10　一遍
11　明恵（高弁）　12　北山十八間戸　13　元亨釈書　14　道理

【1】

解答

1　㈡　2　㈢　3　㈠　4　㈦　5　㈠　6　㈣
7　㈦　8　㈥　9　㈧　10　㈤

解説

古代～近世の著名な僧侶に関する問題である。基本的事項が多く，選択肢もあるので難しくはないだろう。

（A）「栂尾（とがのお）」という地名，「華厳宗」「法然の教義を批判」といった事項から明恵（みょうえ）を導き出してほしい。明恵は高弁（こうべん）ともいい，1206（建永元）年に高山寺を開創した。また1212（建暦２）年には『催邪輪（ざいじゃりん）』を著し，菩提心を無用扱いし，浄土宗以外の諸宗を群賊扱いしているとして，法然の著した『選択本願念仏集』を批判した。明恵はまた，女人救済にも努めている。

（B）「北陸・東海・近畿の各地で布教」「本願寺」といった事項から蓮如に関する文章であることがわかる。蓮如は本願寺第８世法主で，本願寺教団を飛躍的に発展させ，中興の英主とされる。蓮如は教線拡大に当たって，消息形式の仮名法語を門徒に頻繁に書き与えたが，このうちの約80通を孫の円如が選出し，天文年間に証如が「御文（おふみ）」として編集した。

（C）『入唐求法巡礼行記（にっとうぐほうじゅんれいこうき）』「山門派」「寺門派」がヒントとなる。日本における天台宗は，最澄によって開かれたが，円仁・円珍はその弟子である。円仁は第３代の天台座主であり，一方の円珍は第５代の座主で園城寺の復興に努めた。彼らの仏教に関する解釈の相違から，その弟子らが対立し，円珍派は三井の園城寺に移り独立，10世紀末には円仁の流れを引く山門派と円珍の流れを引く寺門派の２派に分裂し，互いに争うようになった。なお，『入唐求法巡礼行記』は円仁の在唐10年間の旅行記である。

（D）「真言律宗」「社会事業」「鎌倉」といった内容から，忍性を思い出してほしい。忍性は鎌倉時代の律宗の僧で，叡尊より受戒した。ハンセン病患者救済のために北山十八間戸を奈良に設けた。また，のちに鎌倉に移り，同地で極楽寺を開き，鎌倉を中心に道路・橋架の構築など社会事業に尽力した。

（E）紫衣（しえ）事件に関する文章である。紫衣とは高徳の僧尼に対し与えられる紫色の法衣・袈裟のことで，もともとは紫衣着用の勅許は朝廷の権限に属していた。一方江戸幕府は，禁中並公家諸法度・寺院法度において紫衣の勅許は幕府の許可が必要であるとの旨を記していたが，後水尾天皇は無断で大徳寺や妙心寺の僧に紫衣を与えた。この事実が発覚すると，1627

（寛永４）年，幕府はこの紫衣着用の勅許を無効とした。これに対して後水尾天皇は幕府に反発，大徳寺の僧沢庵も抗議したが，幕府はそれを受け入れず沢庵を処罰，後水尾天皇は退位するに至った。

【2】

解答

(1) ハ	(2) ロ	(3) イ	(4) ロ	(5) ハ	(6) イ	(7) ハ	(8) イ
(9) ロ	(10) ハ	(11) ロ	(12) ハ	(13) ロ	(14) ハ	(15) ハ	(16) ロ
(17) ロ	(18) ロ	(19) ロ	(20) ハ				

解説

平安末～南北朝期の文学と史学に関する問題である。書名・著者名に関する正確な知識が要求される。

(1) 『梁塵秘抄』20巻は後白河上皇撰の歌謡集。現在はその一部が残存する。平安時代後期の今様を分類集成したもので，当時の芸能・風俗を知る上で貴重な史料である。

(2) 『今昔物語集』は平安時代後期の説話集。インド・中国・日本の３国にわたる古今の仏教・世俗説話を集録する。欠巻脱落があるが，1000余話が現存しているのは説話集の中で最大。古代末期の社会の諸相をよく捉えている。『沙石集』は鎌倉時代中期の無住著の仏教説話集。庶民生活の実話などに取材し，笑話もまじえながら教理を説く。『十訓抄』は編著者不詳の鎌倉時代中期の説話集。年少者のために10項目の徳目に分けて，日本・中国・インドに伝わる教訓的な例話を集める。

(3) 『陸奥話記』は平安時代後期に成立した軍記物語。作者未詳。前九年の役の模様を源頼義の戦功を中心に和様漢文で記述する。乱後それほど遅くない時期の成立とされ，軍記物の先駆とされる。

(4) 『栄花物語』は宇多天皇から堀河天皇まで，15代約200年に及ぶ宮廷貴族の歴史が編年体でつづられるが，とりわけ藤原道長の栄華が中心に描かれている。作者は赤染衛門といわれる。

(5) 『大鏡』は作者不詳。平安時代後期の成立か。文徳天皇から後一条天皇まで850～1025（嘉承３～万寿２）年の出来事を記す。藤原道長を中心とした藤原氏の栄華が紀伝体で語られる。『水鏡』は12世紀末に成立。神武から仁明天皇までを記す。『増鏡』は1180（治承４）年の後鳥羽天皇誕生から1333（元弘３・正慶２）年の後醍醐天皇の京都帰還までの宮廷社会の動きを主として記述している。四鏡のもう１つは『今鏡』で，1025～1170（万寿２～嘉応２）年の天皇・藤原氏・村上源氏などの伝記・逸話を書く。

(6) 西行は俗名佐藤義清。鳥羽上皇の北面の武士。23歳の時出家して諸国を行脚。花と月・自然を愛し，遁世修行を行う中で多数の秀歌を残した。『新古今和歌集』の代表的歌人の１人。『山家集』は成立年は不詳。『新古今和歌集』は後鳥羽上皇による勅撰和歌集。1205（元久２）年成立。『金槐和歌集』は源実朝の私家集。1213（建保元）年成立。万葉調。

(7) 九条兼実は源平争乱期，平氏・後白河院などに批判的立場をとり，いち早く源頼朝と提携した。1185（文治元）年に頼朝の推挙により内覧・議奏公卿となり，翌年摂政に就任。1191（建久２）年に関白。1196（建久７）年に失脚。日記『玉葉』が有名。

⑻　承久の乱は1221（承久３）年に後鳥羽上皇が鎌倉幕府を討つために起こした兵乱。幕府が北条政子・北条義時を中心に結集したのに対し，後鳥羽上皇は広範な在地武士を軍事力として組織できずに，幕府軍が勝利し，後鳥羽上皇は隠岐に配流となった。

⑼　『愚管抄』は慈円によって1220（承久２）年に成立した。承久の乱後，増補。日本の歴史を上古・中古・末代の３期に分け，道理の理念によって歴史の展開と論理を叙述し，末代における政治のあるべき姿を説いた。『元亨釈書』は虎関師錬（こかんしれん）著。1322（元亨２）年成立の仏教史書。『百練抄』は968～1259（安和元～正元元）年までの編年体史書。鎌倉時代後期の成立。

⑽　藤原家隆は藤原俊成に和歌を学び，後鳥羽院政下で活躍した。『新古今和歌集』の撰者の１人。藤原定家と双璧とされるが，承久の乱後は不遇であった。藤原行成は三跡の１人で，世尊寺（せそんじ）流書道の祖と仰がれる。日記『権記』が有名。藤原俊成は『千載集』を撰し，新古今調の中世歌風への道を開いた。

⑾　『新古今和歌集』は後鳥羽上皇を初め当時の作品を多く選んでいる。本歌取・三句切・体言止めを駆使し，情趣的・物語的で優艶な新古今調を達成した。『古今和歌集』は醍醐天皇の勅により，10世紀初めに成立。掛詞・縁語を使った七五調の歌が多い。

⑿　鎌倉幕府３代将軍源実朝は万葉朝の歌をよくし，歌集『金槐和歌集』をまとめた。大江広元は公文所の初代別当。源頼政は平治の乱で平氏方についたが，1180（治承４）年，以仁王を奉じて平氏打倒のため挙兵し，敗れて宇治で自刃した。

⒀　『金槐和歌集』は『鎌倉右大臣家集』とも呼ばれる。

⒁　金沢（かねざわ）文庫は北条実時（さねとき）が武蔵六浦（むつら）荘金沢郷の別荘内に創始。初め称名寺に管理させたが，実時が隠退し，この別荘で文庫の基礎を作った。子金沢顕時（あきとき），孫金沢貞顕（さだあき）により蔵書が増加した。北条泰時は鎌倉幕府３代執権で，評定衆を設置し，『御成敗式目』を定めた。北条重時は六波羅探題となり，宝治（ほうじ）合戦後，連署に就任して執権北条時頼を補佐。武家家訓の最古である『北条重時家訓』を残す。

⒂　『徒然草（つれづれぐさ）』は鎌倉時代後期の吉田兼好著の随筆集。自然や人生，社会などについての様々な思惟が240余段の短章に自在につづられ，中世の無常観が色濃くあふれている。『枕草子』は平安時代中期の清少納言の随筆。著者が一条天皇中宮定子に仕えていた頃からの回想，自然観，人生観，行事，事件などが日記風または随想風にまとめられる。『方丈記』は鎌倉時代前期の随筆で鴨長明著。1212（建暦２）年成立。隠者文学の代表作。世の無常を説く。

⒃　『増鏡』は1180（治承４）年から1333（元弘３・正慶２）年の後醍醐天皇の京都還幸までの公武関係を公家側の立場に立って編年体で描いている。

⒄　北畠親房は鎌倉時代後期・南北朝期の公卿。後醍醐天皇の政治を支える。著書に『神皇正統記』『職原抄』がある。吉田定房（さだふさ）は鎌倉時代後期の公卿で，後宇多・後醍醐天皇の信任が厚かった。元弘の討幕計画を幕府にもらしたが，建武政権にも重用され，南北朝期の分裂後は南朝に仕えた。北畠顕家（あきいえ）は南北朝期の公卿。父は親房。鎮守府将軍。足利軍と闘うが敗れて和泉で戦死した。

⒅　『神皇正統記』は常陸小田城で執筆され，関城で修訂された。東国の武士を結集するために書かれたとする説が有力である。

⒆　『神皇正統記』は神代から後村上に至る天皇の事績・歴史の推移を述べ，南朝の正統性を

強調する。後村上天皇に献じられた。

⑳ 『梅松論』は1349（貞和５）年頃の成立。鎌倉幕府の治績から，足利尊氏が政権を掌握するまでの過程を尊氏の側から簡潔に描く。『太平記』は1371（建徳２・応安４）年頃に成立。後醍醐天皇の討幕計画から幕府滅亡，建武新政から南北朝の対立を描く。『後鑑（のちかがみ）』は成島良譲編。1853（嘉永６）年成立。1331～1597（元弘元～慶長２）年の室町幕府に関する史実を中心に，編年体で日ごとに記述し，典拠となった史料を掲げて示す。

【3】

解答

（1） a 石包（庖）丁 b 古墳 c 須恵器 d 田楽 e 勤労感謝
f 布 g 粉河寺縁起絵巻 h 結城氏新法度 i 樽廻船
j 日本山海名産図会（日本山海名物図会）
（2） ① エ ② オ ③ オ ④ エ ⑤ イ

解説

（1）

a 石包（庖）丁は中国東部，朝鮮半島にも分布するもので，稲作の一環として日本に伝来したと思われる。稲穂を穂首刈する半円形の石器で，通常２個の穴がある。後に鉄鎌に代わった。弥生時代の石器には，木材を伐採し加工するための石斧類や，機織りのための紡錘車もある。

b 古墳時代には，朝鮮半島からの渡来人たちによって，新しい文化や技術が伝えられた。４～５世紀頃，弓月君（秦氏（はたうじ）の祖）・阿知使王（東漢氏（やまとのあやうじ）の祖）・王仁（西文氏（かわちのふみうじ）の祖）が来日して，機織・文字・儒教を伝えたことが「記紀」に記されている。漢字の使用の始まりにより，この頃『帝紀』や『旧辞』もまとめられたと考えられる。

c 古墳時代前期から中期初めまでは，弥生土器の製法による赤焼きの土師器（はじき）が用いられたが，５世紀からは，朝鮮半島から伝えられた技術で作られた硬質で灰色の須恵器（すえき）が土師器とともに用いられた。須恵器はろくろを使用し，のぼり窯で1000度以上の高温で焼成。器形は多種で，主に祭祀に用いた。大阪府南部に陶邑（すえむら）の窯跡群がある。

d 田楽は平安時代中期以降に流行した田植祭の祭礼神事芸能で，公家にも流行した。編木（びんざさら）や田楽鼓を持った田楽法師が華美な衣装をまとい，賑やかな音楽に合わせて踊った。とくに松尾社の松尾祭の田楽や大江匡房の『洛陽田楽記』に見える永長の大田楽（1096）が有名。一方，奈良時代に唐から伝えられた散楽に由来するという猿楽は滑稽を主とした芸能である。

e 新嘗祭は，古代から民間・宮廷で行われていた稲の収穫祭であった。15世紀に中断し，近世に復活。明治以後，11月23日が祝祭日となり，昭和戦後は勤労感謝の日となった。天皇即位の時に行われる新嘗祭を大嘗祭という。

f 庸は正丁に歳役（京での労役）10日の代りに布（麻布）２丈６尺を出させる税。次丁は歳役５日の代りに布１丈３尺。中男および京・畿内には，庸は課せられなかった。政府はこの収入で食料・報酬を支給する雇役を用いて土木事業を行った。

g 粉河（こがわ）寺は元来は天台宗で，中世，高野・根来と並ぶ僧兵を擁した。『粉河寺縁起絵巻』は粉河寺の開基と霊験話を描いた絵巻で，平安時代末期から鎌倉時代初期の成立。

h　『結城氏新法度』は，下総国結城政勝（ゆうきまさかつ）が1556（弘治２）年に制定した分国法。104条から成り，『結城家法度』ともいう。結城氏は，小山朝光（おやまともみつ）が源頼朝に従って下総結城を与えられたのに始まる。戦国期に結城政勝は支配圏を拡大し，その後継晴朝は徳川家康の子秀康を養子とした。

i　大坂から江戸に至る南海路に，17世紀前半に菱垣廻船が就航し，18世紀前半には樽廻船が就航するようになり，木綿・油・酒などを運んだ。樽廻船は，1730（享保15）年，十組問屋より酒店組が分離して独立した。菱垣廻船は1000石積の船を使用したのに対して，樽廻船は200～400石船で積荷と船足が速く，上積み荷物として酒以外の商品も運送したため，菱垣廻船を圧倒した。

j　『日本山海名産図会』は，大坂の知識人で酒造家の木村兼葭堂（けんか）により，1799（寛政11）年に初版が出された。諸国の名物や物産が絵図とともに記述されている。

（２）

①　八代集は『古今和歌集』（905）から『新古今和歌集』（1205）までをいう。そのうち『古今和歌集』には漢字で書かれた真名序（紀淑望作）と平仮名で書かれた仮名序（紀貫之作）があり，選択肢のうち最も成立が古いものといえる。『古今和歌集』仮名序の「やまとうたは，ひとのこゝろをたねとして，よろづのことの葉とぞなれりける。……，たけきものゝふのこゝろをも，なぐさむるは歌なり。」は有名な文章である。

②　土器は，1000度以下で焼成した釉（うわ）薬を施さないものをさし，縄文土器・弥生土器・土師器がこれに当てはまる。陶器は，1000～1300℃で焼成した釉薬を施した焼き物で，中世の瀬戸焼などをさす。1000～1300℃で焼成し釉薬を施さない須恵器などは，陶器に含めることもある。磁器は，1300℃以上で焼成した透光性のあるもので，近世の有田焼・九谷焼などがこれに含まれる。楽焼は低火度焼成の陶器であり，黒楽と赤楽があるが，後世の赤楽には透明な楽釉が掛かっている。備前焼（伊部（いんべ）焼）は釉薬を用いず土肌の味わいを特色としている。

③　友禅染は江戸時代に現れた色彩華やかな京染。宮崎友禅（17世紀後半～18世紀初）により，考案された糊（のり）防染で，絹に模様を手描きし，そこへ色をさして糊でおおい，その後，水で糊を洗い落とす。

④　江戸への下り酒では，摂津の酒や山城の酒が有名である。山城の酒は，伏見の酒のように古代からの伝統を持つ。近世になると摂津の酒が発達し，16～17世紀は伊丹・池田の酒が，18世紀以後は灘の酒が江戸への下り酒で首位に立った。

⑤　（ア）　鈴木春信と菱川師宣が逆である。菱川師宣は肉筆美人画に優れた作品を残した。

（イ）　本木昌造は，1851（嘉永４）年に鉛製活字の量産に成功し，1872（明治５）年に東京活版所を開設して「横浜毎日新聞」を印刷した。

（ウ）　『群書類従』530巻は塙保己一の存命中の1819（文政２）年に完成し，木版ができた。続編の『続群書類従』は塙保己一の没後，刊行された。

（エ）　寛政の改革は天保の改革の誤り。柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』は1829～42（文政12～天保13）年に刊行されたが，天保の改革で絶版を命じられた。

（オ）　近世の版画はすべてが木版画というわけではない。1783（天明３）年，司馬江漢は銅版画を創始した。

４章－２　室町～安土・桃山時代の文化

問題

■確認問題

1　神皇正統記　　2　菟玖波集　　3　鹿苑寺・慈照寺　　4　天竜寺　　5　興福寺
6　如拙　　7　竜安寺石庭　　8　村田珠光　　9　足利学校　　10　濃絵
11　慶長版本

【1】

解答

A　イ　e　　ロ　b　　ハ　a　　ニ　c　　ホ　d　　ヘ　b　　ト　b　　チ　d
B　あ　善人　　い　悪人　　う　講　　え　一向一揆　　お　国人　　か　農民
き　法華一揆　　く　町衆　　け　寺請制度
C　1　武士・農民　　2　a・c

解説

鎌倉新仏教に関する問題である。いずれも基本的事項なので確実に解答できるようにしておきたい。

A

イ　法然は浄土宗の開祖。比叡山延暦寺で出家した。『往生要集』を読んで以来浄土教に傾斜し，極楽に往生するには「南無阿弥陀仏」の名号を唱える以外ないとの専修念仏を主張して『選択本願念仏集』を著述した。後鳥羽上皇は専修念仏禁止を発令し，法然は土佐に流罪となった。赦免されると摂津国勝尾寺に住し，やがて京都への帰還も許された。

ロ　法然は，戒律や造寺造塔の不要を説き，此岸（この世）におけるすべての人間の宗教的平等を説いた。

ハ　親鸞は比叡山での修行の後，法然の門に入り専修念仏に帰依した。比叡山や興福寺の念仏禁止要求を受けた朝廷の念仏弾圧により，越後に流罪になった。その後東国で布教し，『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』を著した。

ニ　『歎異抄』は親鸞の弟子唯円（ゆいえん）がまとめた師親鸞の語録。前半は親鸞の語録，後半は異義に対する唯円の意見を述べている。他力本願・悪人正機など，親鸞自身の信仰を伝えている。

ホ　浄土真宗は，真宗・一向宗ともいう。親鸞の死後，３世覚如（かくにょ）は親鸞の廟堂を本願寺と号し，寺院にした。８世蓮如は畿内・北陸・東海を中心に門徒を把握し，教団が拡張した。戦国期には，支配権力と激しい闘いを展開していたが，織田信長への屈服以後は体制化した。江戸時代初期，本願寺は幕府によって東西に分けられた。

ヘ　時宗は一遍の開いた浄土教の一派で，日常を臨終とし，阿弥陀仏の名号を唱えることにより往生すると説く。関東を中心に武士・庶民に迎えられ，鎌倉時代後期から南北朝期にかけてとくに盛んであった。総本山は神奈川県藤沢の清浄光寺（しょうじょうこう）（遊行寺）。

ト　一遍は「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」という名号札を配り，踊念仏を行い全国各地に

念仏を勧進したので遊行上人と呼ばれた。その様子は「一遍聖絵」に見られる。兵庫県真光寺に廟所がある。

チ　蓮如は本願寺８世。越前吉崎を根拠に北陸一帯に布教し，講を利用して教線を拡大した。後には山科本願寺，石山本願寺で布教に努めた。布教のための文書は「御文」として伝えられる。

B

あ・い　「善人なおもて往生をとぐ，いはんや悪人をや」との悪人正機説では，諸宗の許さなかった凡夫の往生を説いており，信仰は農民などに浸透していった。

う　本来，講は仏典を講説する僧衆の集会を意味したが，転じて信仰行事とそれを担う集団をさし，さらに転じて共通の利益のための世俗的な行事とその集団をさした。

え　一向一揆とは，戦国・織豊期の浄土真宗（一向宗）の門徒を主体とした一揆のこと。加賀一向一揆では守護富樫（とがし）氏を追放し，一国の支配権を握った。石山合戦では，宗門の存亡をかけ，破門を盾に織田信長と全面戦争を行ったが，敗北した。

お・か　国人は南北朝期以降の在地領主の一般的呼称。守護大名の被官となる者や，守護を排斥する国一揆の中核となる者や，戦国大名に成長する者があった。農民を率いて一揆を起こし，一郡ないし一国的規模で行動した。

き　町衆を中心とする日蓮門徒が，一向一揆に対抗して山科本願寺を焼打ち（1532）し，天文（てんぶん）法華（ほっけ）の乱（1536）で天台宗に対抗するなど，法華一揆は京都で様々な事件に関与した。

く　町衆は京都を一向一揆の乱入から守り，彼らが中心となり自治権を拡大した。町衆は土倉など富裕な商工業者が中心であった。

け　寺請制度は宗門改において，檀那寺がキリシタンや不受不施（ふじゅふせ）派など禁制宗派の信徒でないことを保証した制度。1671（寛文 11）年に宗門改帳の作成が制度化された。

C

1　法然の浄土宗の教えは主に武家の間に広がり，さらには九条兼実（くじょうかねざね）ら貴族も帰依したため，これを懸念した朝廷によって専修念仏は停止された。親鸞は常陸で関東の農民の間に教えを広めた。また，悪人正機説を唱えることで，農民の間に広がっていった。

2　蓮如は 1471（文明３）年，越前吉崎道場を建てて数多くの御文を作成し，活発な教化活動は北陸から東海・東国・奥州に及んだ。1475（文明７）年，教化を受けた門徒と在地領主との間に生じた利害関係の対立によって吉崎を出，新たに摂津・河内・和泉で布教に専念したことから，北陸と近畿を選ぶ。

【2】

解答

1　ウ　　2　セ　　3　チ　　4　コ　　5　ケ　　6　テ　　7　オ　　8　シ

9　イ　　10　ク

解説

1　淡海三船（おうみのみふね）は大友皇子の曾孫。大学頭・文章博士となり，晩年までこの職を勤めた。奈良時代，石上宅嗣（いそのかみやかつぐ）と並んで代表的な文人とされた。現存する最古の漢詩集『懐風藻（かいふうそう）』の撰者と考えられていたが，現在ではこの説は疑問視されている。唐僧鑑真の日本渡海について記し

た『唐大和上東征伝』の筆者として名高い。

2　石上宅嗣は淡海三船と並ぶ奈良時代の文人で，最初の公開図書館芸亭を開いたことで知られる。芸亭は自らの邸宅を阿閦寺（あしゅくじ）とし，その一隅に漢籍を集め，好学の士に閲覧を許したもの。

3　『性霊集』の正式名は『遍照発揮性霊集』という。真言宗の開祖空海の詩賦，上表文，碑銘，書簡，表白などを集めたもの。

4　紀貫之は905（延喜５）年に紀友則・凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）らとともに『古今和歌集』を編纂し，これは後の勅撰和歌集の規範となった。『古今和歌集』の「仮名序」は，紀貫之の手による。最初のかな日記『土佐日記』は，紀貫之が土佐守の任を終え，京都に戻るまでの様子を紀行文として著したもの。

5　花と月の歌人，旅と草庵の歌人として著名な西行は，藤原秀郷（ひでさと）の末裔で鳥羽上皇の下で北面の武士であった。23歳で出家し，真言僧として修行を行う一方で，全国を行脚して秀歌を残した。その表現は，後世の隠者文学の他，文学や芸能・思想の面で影響を与えた。

6　藤原定家は鎌倉時代前期の公卿で，『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』の撰者である。また漢文体の日記『名月記』を残している。定家の歌風は幽玄・華麗・妖艶で象徴的であり，有心体を唱えた。

7　鎌倉幕府３代将軍源実朝は，武家出身でありながら公家の文化に憧れを持ち，和歌を藤原定家に学んだ。万葉調の歌を詠み，その歌集『金槐和歌集』では男性的なますらおぶりの歌が多く見られる。

8　二条良基は摂政・関白として北朝に仕えた人物である。1356（延文元）年に救済とともに編纂した連歌集『菟玖波（つくば）集』は後光厳天皇によって勅撰に準じられ，連歌は和歌と対等の地位を得た。良基はさらに『応安新式』で連歌の様式を整備し，『筑波問答』によって連歌の在り方を論じた。

9　宗祇（そうぎ）は連歌を完成した人物とされる。1488（長享２）年に弟子の肖柏（しょうはく）と宗長との３人で詠んだ『水無瀬三吟百韻（みなせさんぎんひゃくいん）』は代表作であり，連歌の最高峰とされる。また天皇から庶民に至る連歌を収めた『新撰菟玖波集』は，準勅撰集とされた。

10　俳諧連歌は卑俗・滑稽な内容を表すもので，山崎宗鑑（そうかん）や荒木田守武（あらきだもりたけ）により文芸として独立した地位を持つようになった。山崎宗鑑撰の『犬筑波集』は，近世俳諧の先駆けとなった。

【3】

解答

①　W　　②　Q　　③　L　　④　H　　⑤　F

解説

茶道史に関する問題である。時代に沿った学習とともに，政治史・経済史・文化史などの部門史としての学習をしておくことも必要である。

①　栄西は日本臨済宗の開祖。1168（仁安３）年に入宋し，禅を学んで帰朝した。1187（文治３）年，再び入宋し，求法のためインドに赴こうとしたが果たせなかった。天台山の虚庵懐敞から臨済禅を学び，1191（建久２）年，帰朝。1199（正治元）年，鎌倉に下って幕府の帰依を受け，寿福寺を建立した。1202（建仁２）年に京都に円（天台）・密（真言）・禅の三宗

一致の寺として建仁寺を建立し，戒律を固く守るべき事を主張して，宗教界の刷新をはかった。また東大寺大勧進となってその復興にも尽くした。著書に『興禅護国論』『喫茶養生記』などがある。『喫茶養生記』は1214（建保２）年に完成した。諸病の原因とそれに対する茶の効能や製法などを述べ，初めは医書として用いられたが，のち茶人にも重んじられた。Ｄの明恵上人は華厳宗中興の祖で高山寺の開祖であるが，栄西が宋から伝来した茶の種を栂尾山にまいてその繁殖をはかった。

② 闘茶とは南北朝時代頃から盛んに行われた茶会で，種々の産地の茶を飲み分け，本茶（栂尾のち宇治）と非茶（その他）を識別し，かけ物を争う茶寄合のこと。Ａの団茶は茶の葉を蒸し，臼でついて団子にしたもの。中国唐代の製法によるもので，削って，他の香味商品とともに煮出した汁を飲む。Ｉの碾茶（ひきちゃ）は上質の葉茶をひいて粉にしたもの。抹茶のこと。Ｍの煎茶は茶の若葉を摘んで精製し，湯を注ぎ香りや味を煎じ出した飲み物。Ｕの淹茶（えんちゃ）は，お茶の葉にお湯を直接注いで飲む方式で，1654（承応３）年，福建省から隠元禅師が来日した頃に伝わり，これが広く日本人の喫茶法として定着した。

③ 能阿弥は室町時代の絵師・連歌師。もと朝倉家の武士で６代将軍足利義教および８代将軍義政に仕え，同朋衆となった。水墨画に巧みで，子の芸阿弥，孫の相阿弥とともに三阿弥と称された。代表作に「白衣観音図」がある。また連歌では宗砌（そうぜい）・心敬らと並んで七賢の１人に挙げられ，連歌は『新撰菟玖波集』『竹林抄』に収録されている。Ｅの芸阿弥は足利義政の同朋衆で，能阿弥の子。中国舶載の古今書画・道具の鑑定を職とした。水墨画の他に，茶の湯・連歌にも長じていた。代表作に「観瀑（かんばく）図」がある。Ｒの相阿弥も足利将軍家に同朋衆として仕え，唐物の鑑定や連歌・茶・聞香・花道などに通じた。能阿弥の孫に当たる。書院飾りの法式を大成する一方，茶道にも貢献した。著書に『御飾記』，代表作に「四季山水屏風図」などがある。Ｃの世阿弥は観阿弥の子で能を大成した，足利義満の同朋衆。現行の能の多くは世阿弥の作であり，『風姿花伝』を初めとして多数の能楽理論書を著した。Ｓの立（りゅう）阿弥は，足利義政に仕えて花びんに花を立てるなどして立花成立に貢献した同朋衆である。Ｘの善阿弥は室町時代の作庭家で，将軍家の同朋衆として興福寺大乗院・相国寺蔭凉軒・慈照寺などの作庭に従事した。

④ 一休宗純は室町時代の大徳寺の禅僧。禅宗の腐敗を嘆き，奇行・狂詩でこれを風刺した。村田珠光は一休宗純に参禅し，禅旨を茶の湯に加味した茶道を始め，８代将軍足利義政に仕えたと伝えられる，侘茶の創始者。Ｋの中巌円月（ちゅうがんえんげつ）は臨済宗の僧。元に渡って学んだ後，万寿・建仁・建長寺住持を歴任した。漢詩文に優れ，五山文学の一頂点をなす。Ｐの義堂周信は臨済宗の僧で，夢窓疎石の弟子。足利義満の信任厚く，建仁寺住持，南禅寺住持となる。五山文学の代表者の１人。Ｔの絶海中津は臨済宗の僧で，夢窓疎石の弟子。明に渡って学んだ後，等持寺・相国寺住持を歴任。漢詩文に優れ，義堂周信とともに五山文学の双璧とされた。Ｙの夢窓疎石は天竜寺などを建立。北条貞時・後醍醐天皇・足利尊氏など公武の篤信を受けた。

⑤ 武野紹鷗は堺の商人。茶の湯を村田珠光の門人宗悟らに学び，４畳半の侘茶をさらに簡素化し，３畳・２畳半の小座敷などを創作し，侘茶の中で閑雅の世界を展開した。Ｙの古田織部（ふるたおりべ）は千利休に茶の湯を学び，その高弟で利休亡きあと一流をなし，江戸幕府２代将軍徳川秀忠初め諸大名に茶法を伝授した。織部焼として名をとどめている。Ｚの小堀遠州は千利休・

古田織部とともに三大茶人と呼ばれる。茶の湯を織部に学び，遠州七窯を開き，新意匠の名物茶器を作り出し，その好みは綺麗さびといわれる。将軍・大名・僧侶などの茶の湯の師範をした。庭園の造作で知られる。

【4】

解答

〔設問１〕① 梁塵秘抄　② 伴大納言絵巻　③ 閑吟集　④ 高三隆達

〔設問２〕あ e　い g　う l　え n　お j　か b　き m
く h　け i

解説

平安時代から江戸時代にかけての芸能史である。芸能については不得手な人も多いが，時折出題されるので，系統立てて芸能の変遷を押さえておこう。

①・あ 『梁塵秘抄』は後白河上皇の撰で，平安時代末期の雑芸の歌を分類集成したもので，当時の民衆の姿をうかがい知ることができる。今様は平安時代中・末期に流行した歌謡。今様とは当世風の意味。初め巫女・白拍子などの間に起こり，貴族間に流行した。歌詞の一部は『梁塵秘抄』などに現存している。鎌倉時代以後にわかに衰えた。

② 「伴大納言絵巻」は平安時代末期成立の絵巻物。絵は上巻は絵のみ，中・下巻は絵・詞各２段から成る。清和天皇の866（貞観８）年，大納言伴善男が政敵左大臣源信を陥れるために応天門に放火したが，真相がわかり，かえって善男が遠流に処されたという政治的陰謀事件（応天門の変）の顛末を描いたもの。文献では不明の応天門の構造もわかり，貴重である。

い 田楽は田植えの際，豊作を祈る田遊びから発達し，都市で芸能化された神事芸である。平安中期には田楽法師という職業芸人が出現した。座を作り，笠をかぶり，腰鼓を打ち，びんざさらを打ち鳴らし，笛・歌にあわせて舞った。鎌倉時代から南北朝時代にかけて大流行し，北条高時・足利尊氏らはとくに好んだ。15世紀から猿楽が盛んになるにつれて衰えた。

う・え・お・か 散楽は楽・小舞踊・奇術・曲芸など雑多な戯芸の総称。中国では唐時代以後に盛行し，日本へは奈良時代に伝わったと見られる。その中の滑稽な物まね芸が猿楽と称され，宮廷の余興や寺社の祭礼で興行されていたが，鎌倉時代に入ると歌舞的要素が付加されて猿楽能と呼ばれる一種の楽劇が成立した。一方，従来の滑稽な物まねはせりふ劇に発展した。これが猿楽の狂言である。また猿楽師らは畿内周辺において寺社に隷属して座を形成し，南北朝時代には円満井（金春）・結崎（観世）・外山（宝生）・坂戸（金剛）の大和猿楽四座が興福寺に奉仕した。その中で，観世座の観阿弥・世阿弥父子は，曲舞や田楽・延年の能を取り入れて猿楽能を大成し，足利義満によって保護されて以降繁栄した。

き 幸若舞は室町時代に出た曲舞の１つ。越前丹生郡田中村の幸若大夫一派の舞をいい，室町時代の武将桃井直詮（幸若丸）に始まるという。織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の保護を受け幕府御用の舞となり，幸若舞が曲舞の代名詞となったが演技は形式化した。長唄は江戸時代から始まった音曲。上方長唄・大薩摩などをもとに，歌舞伎踊・歌舞伎劇にともなって江戸で広まった。

③ 『閑吟集』は室町時代の歌謡集。1518（永正15）年成立。収録歌310余首。庶民的内容をもった小唄が多く，宴曲・狂言小唄・早歌など諸種の歌謡を含む。

く　歌舞伎は江戸時代初期，出雲阿国が京都で始めた「かぶき踊り」が始まりとされる。当時，諸国の遊女たちが阿国を模倣して興行した女歌舞伎は，1629（寛永６）年，幕府から風俗取締りを理由に禁止され，代わって若衆歌舞伎として展開した。これも 1652（承応元）年に禁止されたが，その後は野郎歌舞伎に変わり，技芸と脚本本位の演劇として栄え，元禄期には一応の完成を見た。

け　浄瑠璃は 16 世紀に三河地方で盲法師の語り物として発生し，琵琶や扇拍子を伴奏にして語られていたが，17 世紀初めから三味線を伴奏として人形芝居と結びつき，人形浄瑠璃が京都より起こり，元和（1615 ～ 24）末頃江戸でも興行された。浄瑠璃に合わせて人形を操り，狂言所作事を演ずる。竹本義太夫・近松門左衛門出現後，独自の劇形式を完成した。

④　隆達節は，近世初期，堺の商人高三隆達が節付けをした小歌。隆達自作の歌詞もあるが，前代から伝わった歌や同時代の歌も含まれ，恋情を主題としたものが多い。三味線の伴奏なしに普通は扇拍子で歌われた。文禄・慶長頃に上方で流行した。

【5】

解答

A　藤原隆能　　B　伴大納言絵巻　　C　鳥獣戯画　　D　円伊　　E　高階隆兼
F　蒙古襲来絵巻　　G　男衾三郎絵巻　　H　似絵　　I　藤原隆信　　J　頂相
K　如拙　　L　雪舟　　M　四季山水図巻　　N　狩野正信　　O　土佐光信
P　狩野永徳　　Q　濃絵　　R　洛中洛外図屏風　　S　海北友松　　T　長谷川等伯

解説

A 「源氏物語絵巻」は，平安時代末期に宮廷絵師藤原隆能によって描かれたと考えられている。「源氏物語絵巻」は大和絵の先駆とされ，吹抜屋台，引目鉤鼻の技法が用いられている。

B 「伴大納言絵巻（伴大納言絵詞）」は平安時代末期の絵巻物で，３巻から成り，866（貞観８）年の応天門の変の政治的陰謀の顚末を描いたものである。絵は，常盤光長と伝えられ，平安時代末期に成立している。上巻は絵のみ，中・下巻は絵・詞各２段から成る。人物の面貌・姿態を活動的・表情豊かに表現している。わが国の絵画史上注目すべき代表的絵巻の１つである。

C 「鳥獣戯画」は平安時代末から鎌倉時代初期の絵巻物で，鳥羽僧正覚猷らが描いたとされる。当時の仏教界や貴族の社会を鳥獣に擬して風刺的に描いている。京都高山寺蔵。

D 「一遍上人絵伝」は一遍の生涯を描いた絵巻物で，大きく２つの系統があるが，京都歓喜光寺蔵の「一遍聖絵」は鎌倉時代後期に円伊によって描かれた。浄土教を学んだ一遍は，念仏の教えを深め，全国に踊念仏の形で念仏を説いて歩き，遊行上人ともいわれた。農民などの庶民に親しまれる一方，禅的傾向を有していたことから，武家にも尊崇者を集めた。この「一遍上人絵伝」のうち，備前国福岡市を描いた場面は，定期市の開催を示す資料として，よく取り上げられる。

E 「春日権現験記」は「春日験記」とも呼ばれ，藤原氏の氏神春日明神の霊験奇端の数々を５編に分けて描いたもの。1309（延慶２）年，左大臣西園寺公衡が春日社に収めたもので，絵は高階隆兼，詞書は前関白鷹司基忠とその３人の子による。鎌倉時代末期の土佐派大和絵の代表作とされる。

F 「蒙古襲来絵巻（詞）」は肥後の御家人の竹崎季長が元寇での武功に対して恩賞を獲得するため，また子孫に伝えるために描かせ奉納したもので，元寇の様子を知る好資料である。

G 「男衾三郎絵巻（おぶすまさぶろうえまき）」は，武蔵の住人である吉見二郎・男衾三郎兄弟と二郎の娘を中心とする物語である。地方武士の生活を知る上で貴重な資料である。

H・I 似絵（にせえ）は鎌倉時代から南北朝時代にかけて流行した肖像画の一種で，理想化せずに像主に似せて描いた。大和絵を土台に細線を引き重ねて描く技法に特色がある。似絵の祖とされる藤原隆信は藤原定家の異父兄で，その画風は子孫に伝授された。

J 頂相（ちんぞう）は禅僧の肖像画で，修行僧が正しく法を継いだ証明として，師より授けられたもの。衲衣・袈裟を身につけ，椅子に座した全身あるいは半身の像で，写実性に優れる。

K 「瓢鮎図（ひょうねん）」を描いた如拙（じょせつ）は京都相国寺の僧で，水墨画の先駆とされる。「瓢鮎図」は足利義持が出題した禅の公案を題材としており，南宋の水墨画の様式が採られている。

L・M 雪舟は京都相国寺の画僧で，周文を師とした。明に渡ったのち，山口の大内氏の下で雲谷庵に住まい，地方において活躍した。代表作の「四季山水図巻」は 1486（文明 18）年に描かれたもので，山水画の頂点とされる作品である。

N 狩野正信は狩野派の祖であり，室町幕府の御用絵師であった。代表作には「周茂叔愛蓮図（しゅうもしゅくあいれんず）」がある。

O 土佐光信は室町時代～戦国期の画家で，宮廷絵所預や幕府の絵師を務め，土佐派を確立した。代表作には「硯破草子（すずりわり）」がある。

P～R 狩野永徳は桃山時代の画家で，豪奢で華麗な画風の障壁画を制作した。障壁画は城郭建築の発達に伴って描かれるようになったもので，壁や屏風，襖などに描かれ，金箔をはった上に花鳥風月や虎，獅子などを鮮やかな彩色でほどこした濃絵が多く制作された。狩野永徳は「唐獅子図屏風」などの他，織田信長が上杉謙信に贈った「洛中洛外図屏風」も描いている。

S 海北友松（かいほうゆうしょう）は海北派の始祖で，水墨画と金碧障壁画に作品を残している。水墨画の作品としては「山水図屏風」，金碧障壁画には妙心寺「牡丹図・梅花図屏風」がある。

T 長谷川等伯は金碧障壁画と雪舟の流れを汲む水墨画の両系統の絵画を描いた。前者の作品としては「智積院襖絵楓図・桜図」，後者の作品としては「松林図屏風」がある。